

詩と真実

伝統を生かした学習について

講師 白石 凡

私は、一介のジャーナリストでありまして、学問研究の大学でお話をする柄ではありません。それにもかかわらず、前にも、この山口大学の開校記念日に、学生諸君が希望されて講演をしたことがあります。ただいま、あれは十年前だったと上妻教授は紹介されました。大阪の朝日新聞社で、論説主幹と編集局長を兼務していたときで、十年以上も前だったような気がします。その講演で中国の偉大な作家魯迅のことを話したということは忘れておりましたが、講演の後で、学生諸君と喫茶店で、帰りの汽車が出るぎりぎりまで漫談をしたのがたいへん愉快で有益であったのを覚えております。京都大学の開校記念日にも招かれ、これは公開学術講演会というのでありましたが、一般むきとはいえ、一向に学術の講演とは申されないような講演でありました。そんなふうですから、どうぞ漫談を聴くつもりで聴いて下さるよう願います。

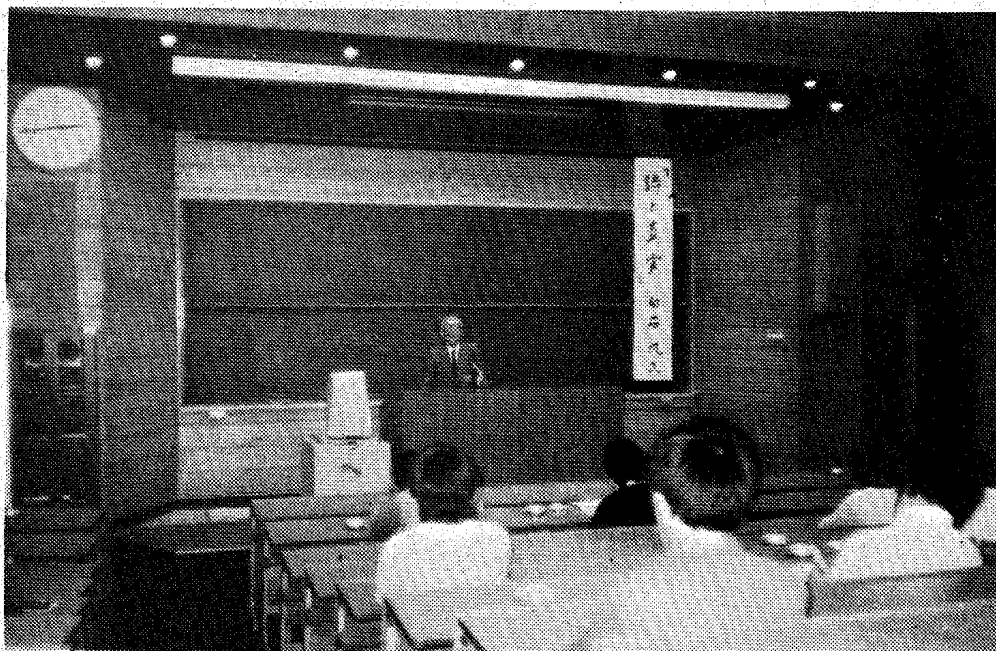
ただいま、私が、この壇上にあがりますと、みなさんは、拍手をして迎えて下さいました。私もこれに答えて拍手をしました。拍手で歓迎し、歓迎されるものも拍手で答えるのは、今日の中国で行われている習俗でして、これはたがいが親しみを感じる、たいへんよいやり方だと思います。上妻教授が申されたように、私は日中友好の仕事をやっており、1949年中華人民共和国が成立して以来、中国を訪れたのが15回ばかりになります。友好というものは、個人の場合でも、相手と自分がことごとく同じになるのではなく、違っ

たところを理解し、違ったところがあるから尊敬するというので結ばれます。尊敬が伴わなければよい友達になれないのは、みなさんが経験されていることでしょう。日本人が中国と中国人をほんとうに理解せず、理解したと思っただけでも誤解だらけで、そのうえ帝国主義の風潮が高まって、尊敬どころか蔑視さえすることになり、日中親善という呼び声も言葉だけに終り、ついには先の両国の不幸な状態を招くことになりました。

今日は、みなさんが中国と中国人を理解されるために何程かのお役に立つこととお話したいと思いますが、みなさんが山口大学で学ばれるにつけて参考になるかと思われる一般のことを主にして、そのなかで、おのずから中国と中国人の話をすることにいたしましょう。

自分でものを考えること

今日の話の演題を求められて困り、苦しまぎれに「詩と真実」といたしました。「詩と真実」というのは、ゲーテの自叙伝“Aus meinem Leben”「我が生活より」の副題“Dichtung und Wahrheit”であることは、みなさんご存知でしょう。ゲーテが自分のなかにある詩人の生長発展をできる限り客観的に



講演中の白石凡氏

描いたものですが、私はこのゲーテの自叙伝の話をするつもりではありません。演題にこれを借りて来ただけです。

思想家、学者の自叙伝または伝記は、その思想、学問を、ほんとうに理解するために、たいへん有用です。どのようにして、その思想、学問に到達したか、発展の経路がわかるからです。また到達した成果を覚るだけでは、その思想、学問が身についたものにはなりません。知るということと、身についたものになるということとは別であります。知ること、覚えることで、あるいは大学での課程を了えることはできましようが、どれもこれもということとはできないにしても、何かを身につける心がけが大切で、それが、生活や仕事にほんとうに役にたつことになります。

自分でものを考えるというのが、すべての根本で、次々に身につけるものによって、自分の考えをさらに生長発展させることができます。自分でものを考えなければ、他人の口まねはできても、自主的な人間にはなれない。頭を他人にあずけることになります。ひとりでは内気で姑息だが、集団になると急に熱をあげ、はねあがる、というのでは、自主独立の人間だとは言えません。自主独立の人間でなくては民主主義は成り立ちません。

どんな思想、学問も、自分で考え、このことは確かだとするものを積みあげていった果てであります。大学というところは、いろいろな思想、学問を学び、ものを考えるには、いろいろな考え方のあることを学ぶところですが、自分でものを考える習慣をつけることは、学生それぞれが心がけるほかはありません。自分で考えたって、すぐにすばらしい成果、結論が出るとは限りません。それでもなお、自分でものを考え、その考えを生長発展させる努力が肝要なのです。

私が先には、中国の偉大な作家魯迅の話をしたとのことなので思い出しましたが、魯迅には、「日本人ほど結論を好む民族、即ち議論を聞こうが、本を読もうが、もしついに結論を得なかったら、どうしても気がすまない民族は、今の世の中にすこぶる少いらしい」と書いているのがあります。これは日本人にとってたいへん痛い意味深い言葉で、つまり、自分でものを考えること、

考える経路こそが重要なことを言っているのだと思います。この魯迅の言葉は、1935年に書いたものですが、今日の日本人にも、適切な忠告になっております。とりわけ新しい時代を開く任務を負うておられる若いみなさんが、これを心にとめておいて下さるよう願います。

伝統を新しい視覚で見る

民族の文化は、先人の業績を継ぎ、これを発展させてゆくのが正常で確かな足どりであります。先人の思想、学問を学び、その自叙伝や伝記を読み、自分でものを考えるのはそのため、新しい中国でも、「古為今用」古いものを今日の用に役だてる、「推陳出新」古いものをひきだして新しいものを作り出す、と言い、ただ古いものを何もかも棄て去るのでなく、今日の用に役だつものを調べてとり入れるのです。古文化財の発掘、保存もそのためであります。大学でも、その前時代、先輩たちがやったことで、新しい時代に役だつものを選びとり出し、さらに発展させるのが、伝統を生かした特色のある大学とすることになりましょう。

私は、みなさんが現在学んでおられる山口大学経済学部の前身である山口高等商業学校に学び、京都大学の経済学部へ入学したのですが、私のまずしい経験をお話することが、みなさんが、この山口大学の経済学部で勉強をされる励みにいささかでも役立ちましたら幸であります。山口高商というのは、その前にあった山口高等学校を、明治38年引き継いだ学校で、おそらく日露戦争後、日本が経済的に躍進する時代を迎え、それに応ずるために、商業教育をたかめる必要があったのでしょう。高等商業学校という官立の専門学校は、小樽、東京、神戸、そして山口、長崎に創設されたのですが、山口高商は、山口高等学校を引き継いだので、私が入学した大正の7年ころもまだ前の高等学校の気風が残っており、帽子にも当時の高等学校の二本の白線があり、徽章だけが新しくなっており、他の高商とはいささかちがっていました。やがて新しく山口高等学校ができて、帽子は改められましたが。……みなさんも御存知と思いますが、「花なき山の山かげの」という寮歌は、今日も同窓

会である鳳陽会の会合でいつも歌われていて、この寮歌は、もともと山口高等学校の寮歌として作られたもので、歌詞は佐々政一、国文学者佐々醒雪文学博士の若き日の作品です。博士は山口高等学校の卒業かと思えます。みなさんも、「花なき山の山かげの」を知っておられるのではありませんか。

山口高商では、第一外国語は英語ですが、第二外国語は、中国語、ドイツ語、ロシア語、そしてやがてフランス語が加わりました。中国語をやるものがいちばん多く、これは、東亜問題研究が、学校としての特色をなしていたからだと思われれます。現在の山口大学には、東亜経済学会があって、その機関誌が学界の注目するところになっているのは、山口高商が東亜に目をむけた伝統を受け継いでいるもので、うれしく存じます。伝統を受け継いだといっても、さきに話しました中国の「推陳出新」でありまして、帝国主義の風潮のなかにあったそのままを受け継ぐのではなく、今日の新しい視角でとらえなおしておるのです。

みなさんは、東西問題、南北問題というのが何か御存知でしょう。また中国が世界情勢を分析して、アメリカ、ソ連の二つの超大国を第一世界、ヨーロッパ(E C)、カナダ、オーストラリア、日本など資本主義の発達した諸国を第二世界、国家の独立、民族の解放、人民の革命をめざして進む、いわゆる発展途上のアジア、アフリカ、ラテンアメリカなどの国々を第三世界と類別したのを御存知でしょう。ここで、その問題についてお話するいとまはありませんが、東亜経済研究の新しい視角というのは、東西問題を南北問題のなかでとりくまなければならなくなっておること、アジアの諸国は多くが第三世界に属し、その問題を解決するためには、日本自身の思想と現実を再検討する必要があるということ、これは人間の歴史が古代から中世、中世から近代に移ったのと同じく、今日が近代以後の歴史の転換期にあるという認識によってであります。やがてみなさんの時代になるのですから、このことについて大いに研究されることを願います。そして、東亜経済研究、新しい国際経済研究なら山口大学へ行けというふうになることを期待します。

私は、最初に、日中友好のことを話し、中国と中国人を理解する努力につ

いてふれましたが、中国人に限らず、アジア人は、日本人と顔も姿も似ており、その文化に親近性があるって、その国、人民のことは、なんとなくわかっている気になり、それぞれに特異性があるにもかかわらず、これを知る努力をしようとせず、それどころか、とかく日本人の考え、習俗をも相手に押しつけようとする傾きがまだあります。それでは第三世界の人民が新しい人間の歴史を創造しつつあるについての理解がおろそかになります。これを改めることが肝要で、それにはまず、それぞれの国の言葉を勉強することをおすすめします。

私は、山口高商で第二外国語をドイツ語にしました。これは京都大学経済学部へ行って役にはたちましたが、日中友好の仕事をはじめようになって、中国語をやらなかったのを悔みました。語学は、若いときでないと、なかなかうまく進まない。みなさんのうちには、中国語をやっておられる方がおられるのですが、いまのうちに、アジア諸国の言葉をも学ぶことを心がけられるように望みます。さしあたり朝鮮語をやられるのもよいでしょう。私はアジア・アフリカ作家会議の仕事をしていまして、その経験から申して、英語、フランス語で一応の用を達することができますが、その国、その民族を理解するためには、どうしてもその国の言葉を知る必要があります。その民族のものの考え方を知るのは、言葉を知るのが近道で、ものを考えるのは、言葉によって考えるからです。

日本は、明治以来先進国の欧米に見ならうことにつとめ、帝国主義までもまねて大失敗をしました。先進国が果たして先進国か。後進国といわれている国が、果たして後進国か。と、考え直さなければならぬ時代になったのです。中国もかつては、先進国に学ぶために、留学生を海外に送り、日本へも多くの留学生をよこしました。しかし中国自身は、その先進国によって半植民地にされて、人民の生活は苦しくなるばかりでした。毛沢東主席の書いたものには、「先生がどうして生徒をいじめると疑った」とあります。そこで、先生である先進国とは違った道を求めるようになったのでした。今日のいわゆる第三世界の諸国も、中国のそれと同じ気持ちにあることを知ってお

きたいと思います。

われらの先輩河上肇博士

今日は、山口大学経済学部の前身である山口高等学校、山口高商の遺産で、今日継承するに足るものは継承することについてお話するのを主題としておりますので、われわれの先輩の業績、それも多くを語ることはできませんので、私が傾倒し、今日もその恩恵をうけている河上肇先生について、少しばかりお話して、みなさんの勉学の参考に供しようと思います。

河上肇先生は、山口県岩国市の出身で、旧山口高等学校を卒業されました。河上肇といっても、若いひとびとには、あるいはなじみの少ない名であるかも知れませんが、河上肇先生は、大内兵衛博士、現在日本の経済学界の大先輩によりますと、明治、大正、昭和の前期を通じて、日本の経済学を担ったひとりで、日本にマルクス経済学の道を拓き、日本の思想界へ大きい影響を与えた、と言われていています。河上先生は、京都大学経済学部の教授でしたが、日本のファシズムの嵐が吹きはじめた昭和3年教職を追われ、昭和8年治安維持法違反として懲役5年の刑に処せられました。亡くなったのは、30年前の昭和21年で、67歳でした。

私が京都大学経済学部へ行ったのは、山口高商で独自の経済原論を講じておられた作田荘一先生のすすめにしたがったのですが、作田先生も、私が京大の2年生のとき、京都大学経済学部へ転勤されました。作田先生は、若いとき山口高等学校で河上先生と同級の親友でした。当時の京都大学経済学部には、やはり山口高等学校の出身で農業経済学の権威、後に大阪商科大学の初代の学長になられた河田嗣郎先生がおられ、河田先生は、山口高商で分配論の特別講義をされたことがあり、私はそれを聴講しましたが、この河田先生にもたいへんお世話になりました。当時の京都大学経済学部には、有数の教授がそろっていて、経済学をやるなら京都大学へ行けという時代でありました。作田先生は、国際経済学を担当されていました。

ゲーテに、「詩と真実」という自叙伝がありますが、河上肇先生にも「自叙

伝」があって、これは文学作品としても優秀で、例えば文芸評論家の河上徹太郎氏は、「同年輩の自然主義作家の客観描写とは筆力の上で優れている」とまで賞讃しておられます。河上先生は、高等学校を卒業される間際、文科から法科にかわられました。ドイツ語の教師であった登張竹風が「お前の素質は詩人だ、法律などをやる柄ではない」と諭しましたが、先生は思うところを曲げなかった、というような話が「自叙伝」にあります。先生は、詩人、文学者となる可能性を、若いときからもっておられたことがわかります。先生が書かれた経済学の論文が、文章が見事であったのも、一般のひとびとにも影響を与えられたのも、すぐれた文才があったためであります。先生は山口高等学校を卒業して、東京大学の法科大学政治科に入学され、経済学をおさめられました。当時、伊藤博文をはじめとして、山口県出身のひとびとが中央の政界に、無位の野人から一躍進出したことが、少年の功名心を刺激したふしがありますが、旧防長藩の山口県には、吉田松陰に私淑する教学の気風があって、経世家を育てる伝統があり、若い河上先生もまた、経国済民の志を固められたのでした。「経済」というエコノミーの訳語は、経国済民、国を治め民をすくうという言葉から来ております。

河上先生は、大学を出て間もなく「社会主義評論」というエッセイを書いて文名を一時に高められました。最初からマルクス主義経済学に傾倒されたのではなく、アダム・スミス以来のブルジョア経済学を次々に学び、研究を重ねてゆくうちに、満足ができないまま、徐々にマルクス主義へ移ってゆかれたのでした。自叙伝には、その生長変転の道筋が書かれてあり、またこれは真理だと思ふものには、徹底的に喰いさがって、掘り下げるが、しかし真理と思つて取組んだ相手がそうでなかったとわかれば一切の行きがかりに拘泥せず振りすてる、という真理探求の態度が書かれてあります。マルクス主義を真理とされるに至っては、思想の自由を許さぬ弾圧がはげしくなるにもかまわず、かえってその実践運動にまで進んでゆかれました。河上先生が国士的な国民主義から人道的社会主義に移り、さらに戦闘的マルクス主義に転身された経緯、そして時代も明治から大正デモクラシーを経て、昭和のファ

シズムにどのようにして変わったか、先生がその変転にどのように対処されたかを知ることは、今日の大変動期に処するための参考になります。河上先生の諸著作とともに「自叙伝」をお読みになることをおすすめします。

河上肇博士の「詩と眞実」

お話したように、河上先生は、高等学校の教師戸張竹風から「お前の素質は詩人だ」といわれました。たしかにそういわれるだけのことはありました。先生は多くの詩、短歌、漢詩を書き残されております。私はそれを集めて「河上肇詩集」を作り解説を書きました。詩人で作家の中野重治氏は、先生の少年のときにもっていた詩的可能が、時勢のおもむくところジャーナリスト、学者として、共産主義者として現実化してゆき、出獄して学問的・政治的活動が禁止され封鎖されると、その封鎖のすきから、本来の詩的可能が押し出された、というふうに語られています。「河上肇詩集」のうち、入獄中および出獄後の晩年に作られた作品がもっとも多いのです。私も、中野氏の説に賛成で、先生の人間の魅力の根源が詩人であることにもあったとさえ思います。

私は、先生の詩歌をあげて、ここで紹介する余裕がありませんが、詩人と申しましてもいろいろで、河上先生は、どのような詩人であったかをお話しましょう。先生は、日本の経済学者のうちで、もっとも多くの著作をされたのですが、詩人であれば、だれでもが、すぐれたジャーナリスト、学者になるとは限りません。先生をしてそのことを可能にしたのは、どのような詩人であったからでしょうか。

中国の古い言葉に「実事求是」というのがあります。これは毛沢東主席がとりあげて解釈を加え、中国人民の行動、実践のひとつの指針にもなっております。「実事」とは、客観的に存在しているあらゆる事物のこと。「是」とは客観的な事物の内部的つながり、法則性、真理であり、「求」とは、調査、研究であります。つまり実際の状況を観察し調査し研究して、憶則でない固有の法則性、内部的つながり、真理をひき出すことであります。この「実事求是」は、およそものを考え研究する基本であります。詩には、それぞれ定

型律があって、それにおさめるように、適切な、ぎりぎりの言葉をえらぶのですが、この詩においても、何を詩にするかの素になるのは、やはり「実事求是」の結果であります。普通には見えないものが見えるのです。中野重治氏が言われたジャーナリスト、学者として現実化させた詩的可能は、この「実事求是」があつてのことで、「実事求是」なくして、すぐれたジャーナリスト、学者になることはできません。詩といつてもいろいろで、先生の詩作は、したがって花鳥風月の風流に遊ぶ方向には展開しませんでした。

先生の著作に、「陸放翁鑑賞」というのがあります。放翁は、南宋の詩人で、官吏であり、学者でした。先生は、何故に放翁の詩に傾倒したかを「ただ風月を楽しむというだけの人間であるなら、私はたいした興味をもたない。ところが放翁には、他の一面に志士としての面目があり、その胸底には経世家としての気概が死に至るまで燃え続けている。いわば宋の国家の愛国の熱情である。第三は道学者としての面目である。」と書いておられます。これは、先生の詩についての傾向、好みを語っているし、先生自身が、放翁と同じように、経世家であり、愛国者であり、求道者であったことを示しております。

「実事求是」が詩の場合も素になると言いましたが、その知性に加えて、抒情がなければ、詩にはなりません。先生には、先生の言葉で言えば「人間を愛する清純な気持ち」が心底に常に燃えていて、これが、愛国の熱情にもなり、詩の抒情をかきたてたのでした。中国の毛沢東主席も詩人で、39首ばかりが発表されておりますが、その革命詩は、まさしくリアリズムとロマンチズムの結合で、河上先生の詩もまたリアリズムとロマンチズムの結合といつてよいでしょう。ただの詠嘆や模写の詩ではありません。人を感動させる詩は、あらわな言葉がなくても、その詩人が、人間を愛し、人間を信頼する心を深く蔵していることを感じさせるからです。詩にかぎらず、他の芸術でも、絵画の場合にしても、人間にまったくかわりのない深山幽谷がどのように見事に描かれても見るひとの興味をひかない。そのどこかに人間の生活と情意が感じられるものがあるのでなければならぬ。たとえ人間そのものは描きこまなくても。河上先生は、そのような詩人でありました。

詩作だけでなく、河上先生の思想、学問には、人間を愛する情熱が燃えていて、その人間愛の故に真実を求め抜かれたということもできます。それをヒューマニズムと言ってもよいでしょう。経済学は、先生の時代よりも進みましたが、それは当りまえのことですが、その経済学が、だんだんテクニク化した傾きがあり、主体はどこまでも人間であるということがなおざりになり、それが今日諸々の矛盾を生んでいるのではないのでしょうか。

人間を主体とする思考

河上先生の漢詩に、「良寛上人の画像に題す」というのがあって、それに「書を学ばんとすれば先づすべからく人を学ぶべし、形骸相似るもことごとく真をそこなう」という句があります。良寛の字を習うひとが、大正の終りごろから多くなり、良寛の書が高値を呼んだのでした。良寛の字を学ぶには、形だけを真似しても、生きた真実の字にはならない、良寛の人間を学ばなければならない、という意味で、どこまでも、人間が主体だというのであります。学問の場合も同様であります。

中国人がよく言う言葉に、「病を治して人を救う」というのがあり、これは、たとえ間違いがあっても、その間違いをあらためさせればよいので、人間そのものを消してしまってはならない、ということで、これも、人間の尊重であり、人間の信頼であると解することができます。

私たちは、人間いかに生くべきか、という世界の人類に共通する問題にたちかえって考えなおさなければならない時になっているようです。河上先生についてお話することは、多々あって、一日じゅう話しても足りません。このごろ、新しい河上肇研究が、あちこちでなされていて、京都大学では外国の留学生で、研究しているものもおります。先生の名著に、「貧乏物語」「第二貧乏物語」というのがあるのは、ご存知でしょう。貧乏ということは、困ることですが、貧乏とは何か、何故に貧乏が起るか、人間の生活にほんとうに必要なものが、じゅうぶんに生産されず、むしろどうでもよいもの、かえって有害なものが多く生産される、それはどういうことか、不用なもの、

有害なものが手に入らないのを貧乏だからだと考えるのであれば、むしろ貧乏にたえることこそよいのではないか、等々、新しい貧乏物語を考えなければならぬ時代にもなっております。第三世界のひとびとを考えるときはなおさらでしょう。

河上先生は、助教授であった明治44年、沖縄に早くも目をつけて調査に行き、その地割制度を報告されていますが、沖縄が忠君愛国の気風にとほしいという本土での評判について、それ故にこそ沖縄が文化的に進むことを期待できる、文化的に本土よりおくれたと見られる沖縄に実は恵まれた素地があるのだと言われました。忠君愛国が支配的な時代に、このように観察されたのです。このようなところにも、新しく開ける時代の道を考えるのに、教えられるところが多いと思います。

私は、河上先生のいわば貴重な遺産を管理し、先生の人格と業績を、広く永く伝えることを目的にしている「河上会」の仕事をやっております。みなさんは、河上先生が、山口大学の先輩であることを思われるならば、先生を学び、研究する気持ちが、ひとしお強くなられるのではないかと期待します。そして「椎陳出新」の学習をされることを希望します。

先にお話しました寮歌「花なき山の山かげの」の最後の節は、「鳳翽の峯ひくくとも、樵野の流れほそくとも、とこしなえなる山川は、わが友垣の姿なれ」であります。友垣には、現在のみなさんだけでなく、古い先輩のひとびとも加わっております。鳳翽の峯と樵野の流れは、そのとこしなえなる友垣の姿であります。山口市は、古くから学校が多く、学都といわれていました。山口大学によって、学都がさらに輝やかしくなることを望みます。このことを望んで、私のおそまつな漫談を終りにいたします。